



# 暁鐘の音

NO. 26

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2022.11.30

## 記憶と忘却

教職実践専攻（教職大学院）

教授 鎌田 信

その一行が必要で買った本であったが、ずっと棚に並んでいるだけの本も多い。確認したいことがあり、四十年ぶりくらいに手にとった本がある。重要箇所には傍線があり、行間には自分で書いたはずの覚え書きもあった。熱心に向き合った時間があつた証拠だが、この本のことはずっと忘れていた。

昔の映画を楽しむことができる。なぜならば初めて見る映画ではないのにストーリーを忘れていたからである。主人公がいかにしてこの窮地を脱するのか、時には犯人が誰であったかすらも忘れて、再び楽しめるのである。ミスリードの記憶でうまく攪拌されたせいかもしれない。しかし、細かなディテールはよく覚えていたりすることもある。

先日、何十年かぶりに教師時代の教え子と再会し、良き昔を回想し懐かしい気持ちになった。彼は私が話したことを鮮明に覚えていて、その中の一言が心に響き、今もその言葉を大切にしていると言ってくれた。教師冥利に尽きるのだが、たぶん何気ない会話の中で、私はその時のシチュエーションや自分の言葉を忘れていた。

彼の記憶の中で存在した私、忘れ去られていたかも知れない私、でも私には誠実に子ども達に向き合ってきたかどうかの問題であり、彼らの記憶に残る残らないは問題ではない。それでも教師という存在は何らかの影響を子ども達に与えているに違いないと思う。

忘れていても、現在の自分を作っているのは過去から学び続けているあれこれであろうし、気付かないうちに刷り込まれている過去の映画のヒーローたちのカッコよさかも知れない。学校の教師たちもきっと、ヒーローなのだ。



### 師の思い出3

教職実践専攻（教職大学院）

特別教授 秋元 卓也

「暁鐘の音」に秋田大学学部生、大学院生時代を通じてお世話になったO先生の思い出を寄せるのも3回目を数えます。お付き合いください。

大学三年生の冬、先生と県庁職員I氏と私は、佐渡に向けたフェリーに乗っていました。自然繁殖では命を繋ぐことが困難なほど数を減らしたトキを、ネットを取り付けたロケットにより捕獲するという計画が明らかにされたときのことでした。人工繁殖が行われるその前に、囲われることなどなかったはずの佐渡の空を自由に飛ぶ、その姿をどうしても見ておきたいとの思いでした。

午後3時頃でした。鉛色の空と暗く深い碧色の海に挟まれたトキは、数羽の群でやって来ました。弱い冬の光に薄桃色に透けた翼をゆっくりと羽ばたかせていました。

国の天然記念物、国際保護鳥であるトキの保護に、当時中心的役割を担われた佐渡トキ保護センターのT氏、民間の立場から尽された元高校教員のS氏との交流も、今となっては得難い経験でした。（後に両氏は、あるテレビ番組で取り上げられることとなります。）

先生は、帰りのジェットフォイルの中で、「自然とヒトとの関わりに、何か見つけたものはありますか。」と尋ねられました。常に先生からの課題提示に何か答えを見つけようとして来た学部生、院生時代でした。しかし、それではいけなかったのだと、正にこの今になって実感を伴って気付かされるのです。本気で求めるものでなければ、出てくる答えに何か意味があるのかなど。遅かった・・・。

### 教職大学院の学びと現在（いま）

三種町立浜口小学校

校長 大山 正道（令和2年 大学院修了）

私はこの4月より、三種町立浜口小学校で校長の職に就かせていただいています。児童数が75名、教職員数が21名の小さな学校です。小さいとはいえ、新学習指導要領に基づいた多様な教育活動が日々展開されており、多忙な毎日を過ごしています。新型コロナウイルス感染症への対応とGIGAスクールで準備された一人一台タブレットの有効活用（授業・オンライン）が喫緊の課題でしょうか。

さて、私が秋田大学教職大学院で学ばせていただいたのは、令和元年度です。入学初日に院生室で菅官房長官による新元号「令和」の発表を生で見っていました。2月末には安倍総理大臣が新型コロナウイルス対応として全国一斉休校を要請しました。

そんな激動の令和元年度でしたが、私は教職大学院で管理職としての資質・能力を磨くことができました。諸先生方の情熱的で工夫された講義や院生室での現職・ストマスのみなさんとの交流、宮城県への研修旅行など、教職大学院での学びがすべて私の成長の糧となりました。

まだ少しの期間しか経験していませんが、校長という仕事は簡単に表現すると「決断」と「責任」と感じています。いまだに新型コロナウイルス感染症の影響で、毎日のように初めての出来事が発生し、その都度決断を迫られています。教職大学院での学びが、日々の職務に直接役立っているかという、正直必ずしもそうではありません。ただ、長い現場での経験に教職大学院での学びが理論的裏付

けをしてくださいました。現場での経験と教職大学院での理論的裏付けが自分の中の教育の核として、決断する際の基準となっています。決断を下す場面、場面で教職大学院の学びが確実に生きています。

それでは、教職大学院でお世話になりました諸先生方、現職・ストマスのみなさんに改めまして深く感謝を申し上げます。現在の院生のみなさんも勉強がんばってください。



### ありのままの自分で

由利本荘市立鳥海小学校

教諭 岸 陽弘 (平成 30 年 大学院修了)

「あなたは5年後、どんな先生になりたいですか？」教員採用試験の面接練習で、当時学部4年生だった私が頭を抱えた質問です。「どんな先生になりたいですか？」と聞かれると、「信頼される先生」と、それらしい回答をしていました。しかし、「5年後」という具体的な数字が入ってくると、自分が教育現場に出ている姿をイメージできず、悩んだことを覚えています。今は迷わず「素の自分を出すことができる先生」と答えます。この考えに至るまでに、たくさん子ども達と関わり、たくさんの経験をしてきました。

私は、秋田大学教育文化学部学校教育課程を卒業し、その後、秋田大学大学院教育学研究科教職実践専攻に2年間在籍していました。学部生時代の教育実習や教育福祉実習、大学院生時代のインターンシップや講師経験など、子ども達と関わるチャンスをたくさんいただきました。その後、県内の小学校に採用されて今に至ります。勤務校は2校目で、早いもので学生を終えて5年が経過しました。先述の通り、私は教職に就くために少し多く準備をすることができました。その準備を終えて教育現場に出た際に、特に感じたことを3つ程紹介したいと思います。

一つ目は、業務量の多さです。授業のみでなく、子どもからの悩みの相談、職員会議、行事の準備・打合せ、学級通信の作成など、働いてみなければわからないことがたくさんあります。しかしだからこそ、大学院までの6年間で、授業で知識を得て、実際に教育現場に身を置く先生方からお話を聞くことができたことは貴重だったと思います。大学・大学院も、教育現場でも、一人で悩んでいても解決しません。分からないことは悪いことではないので、タイミングを見計らって積極的に同僚の先生方へ質問をするようにしています。

二つ目は、学級づくりの難しさです。教育現場に出たばかりの私は、すべての仕事を120%の力でこなそうとして失敗し、くよくよ後悔する日々を過ごしていました。そのため学級の子どもたちも、ネガティブで一步踏み出すことができず、どこか後ろ向きだったように思います。「学級は担任を映す鏡」というように、担任が失敗を気にしなければ、自然とそのような子どもが増えていきやすくなります。

三つ目は、責任の重さです。実習やインターンシップでは、指導してくださる先生方が、学校や大学にいます。しかし、社会人になると、そのように自分を守ってくれる人はいません。そのため、責任は

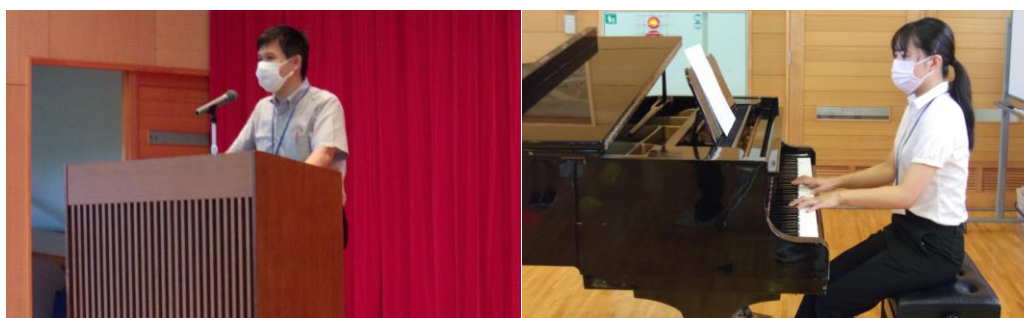
全て自分に降りかかります。このように聞くと学生の方は一歩引いてしまうかもしれませんが、むしろ良いことの方が多いように思います。特に自分がそのことを感じるのは、子どもの「できた！」を共有できたときです。一つの「できた！」に至るまでの子どもの成長の過程や悩む姿を見ることができるので、感動もひとしおです。担任が子どもと一緒に悩んで成長することができるのは、この職業ならではの魅力だと思います。

特に感じたことはこの三つですが、ここでは語りつくせないような出来事がたくさんありました。また、これらの出来事を通して特に感じたことは、自分を取り繕っても得をしないということです。そのため、今の自分は、5年前想像していたよりもゆるく自然体で生きています。5年後の自分はどうなっ

ているでしょうか。目指す姿はありますが、きっと今後の子ども達との関わりで変化していくことと思います。これからも、変化を恐れずに、ありのままの自分で、子ども達と関わっていきたいと思います。



子ども達の言葉を使って授業を進めています。



同じ教育学研究科を修了した正木節教頭先生、伊藤真里奈先生もいます。心強いです。

## 夏休みと中間発表

学校マネジメントコース  
現職院生1年次 嗟峨 静人

8月10日頃より始まった長期間にわたる夏休みであったが、このような長期間の休みは生涯初めての経験であった。とは言っても大学には出勤し、教育実践報告書を提出し、自らの研究に関する仕事を少しずつ進めていた。そして日々天気予報とのにらめっこ。趣味の登山に適する日を見定め、週休や夏季休暇、年次を組み合わせる休みを捻出し、今年度は、会津駒ヶ岳を

皮切りに16百名山を登ることができた。(①会津駒ヶ岳、②甲斐駒ヶ岳、③常念岳、④雲取山、⑤白山、⑥八ヶ岳、⑦乗鞍岳、⑧白馬岳、⑨吾妻山、⑩蔵王山、⑪水晶岳、⑫鷲羽岳、⑬黒部五郎岳、⑭薬師岳、⑮焼岳、⑯五竜岳)これは通常の勤務であれば、年間2～3回の遠征しかできないので、5年分にあたるものである。大学に入学したからこそできた、有意義な体験と

なった。そして⑯五竜岳をもって今期最後の登山とし、9月27日の中間発表会に臨んだ。

中間発表会では、院生の皆さんが着々と進めてきた実践が紹介された。どれもこれも工夫が凝らされ、アンケートの分析や、教職員間で行われた研修会の内容などが報告された。「もうできたんじゃないか」と思われるような完成度の高いものまであり、大いに刺激を受けた。院生の発表を聞いていて、「マネジメント」が中心概念にあり、「メンター、メンティー」、「OJT」、「コーチング」などの要素がどの

発表にも共通していて、究極的には似ている部分が多いと感じた。児童・生徒の調べ学習が実践された最初の頃、その中間発表を見せる公開授業が盛んに行われた時期があった。今回自分が体験してみて、院生や教授の方々から意見を頂いたり、自分の研究を他の研究と比べてメタ認知したりするなど、効果的であることを身をもって体験した。これからはいよいよ論文作成である。登山で鍛えた粘り強さを発揮し、滑落せず、必ずや完成させたいと思う。

### 研究計画・中間報告発表会を終えて

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生1年次 武石 早穂

9月27日(火)に実践研究計画・進捗状況発表会が行われました。昨年度に引き続き、Zoomでの開催でしたが、理論の面で様々な意見をいただき、多角的な視点で自分の研究を見直す貴重な機会となりました。

私と同じグループでは、カリキュラム・授業開発コース5名と学校マネジメントコース1名が発表しました。ストマス2年の方や学校マネジメントコースの先生の発表からは、具体的な実践の見通しをもつことで、理論と実践の往還を実現できることが分かりました。来年度、一貫した研究を進められるよう、今年度の研究を生かし、課題意識を明確にしていきたいと思います。

私を含めたストマス1年の3人は、それぞれの専門教科を軸に研究計画を立てていました。私は、音楽科における「メタ認知」について研究する計画でしたが、先生方からお話を伺い、研究の問題

点に気付くことができました。「メタ認知」については、今年度の附属小学校公開研究会での三宮真智子先生のご講演から、これからの「生きる力」の育成に欠かせないものだと感じていました。しかし、実践でどのように扱うのか、音楽における「メタ認知」とは何かといった基本的な考えが自分に足りなかったと知り、研究の方向性を改めて考え直すきっかけとなりました。この気付きが無ければ、研究はおろか、授業での子どもたちの学びすらなかったのではと感じています。

実践研究の発表の仕方についても、多くの事を学ぶことができました。先行研究や教材研究から、自分なりの仮説や理論を立てることも、今回初めての経験でしたが、それらを可視化・言語化し、他者に分かりやすく伝えることの難しさも分かりました。今年度の研究をまとめる際にも、今回の学びを生かしていきたいと思います。

## 魅力いっぱい仙北市への旅

学校マネジメントコース  
現職院生1年次 菅原 渉

10月14日(金)～10月15日(土)の2日間、我々秋田大学大学院のメンバーは、課題実地研究として仙北市にて研修を行いました。

### <1日目>

バスに乗り、仙北平野に広がる黄金色の田んぼとそれを囲むように連なる奥羽山脈の山々を眺めながら、一路西明寺小学校へ。西明寺小学校は、全校児童111名の小規模校で、「夢ふくらませ 心かがやく ～心豊かにたくましく、挑戦することで自信を深め、新たな自分を獲得できる子どもの育成～」という学校目標のもと、地域学校協働活動を推進しながら、「くりっこ探検隊」などの地域に根ざした特色ある教育活動を行っている学校です。

小学校では、6年理科の授業を参観しました。「大地のつくりと変化」という単元のまとめの部分で、地震災害から自分の命を守るための対策を考える授業でした。市全体で力を入れているICTを随所に活用するとともに、担任と理科の専門監とが協働して“誰一人取り残さない”授業を進めている姿や、児童が集中して課題解決に取り組んでいる姿から、学ぶべきことがたくさんありました。



【ICTを活用した6年理科の授業の様子】

昼には、特別に給食をいただきました。仙北市に伝わる郷土料理「御狩場焼(おかりばやき)」をメインとする地産地消の献立により、私たち院生の身も心も温かくなるようでした。



【本日の給食】

授業参観後には、仙北市教育委員会須田教育長さんや委員会関係者から、仙北市で推進する学校教育について説明がありました。また、西明寺小・中学校の校長先生、西明寺小職員も参加しての授業研究会も行われました。院生からも活発に意見が出され、充実した授業研究会となりました。



【教育長講話や協議の様子】

宿泊したホテルは、田沢湖高原にある「ホテルグランド天空」。館内のいたるところから田沢湖を一望できる、最高のロケーションのホテルでした。



【ホテルでの豪華な夕食と田沢湖の眺望】

< 2日目 >

2日目は、秋田大学の林先生から、田沢湖の成り立ちからクニマスまで、ご専門の「火山」を切り口に楽しく解説していただきました。県内に住む者にとって田沢湖はウインタースポーツのメッカとしての認識が強いかもしれませんが、林先生から教えていただいたことをきっかけとして、田沢湖周辺を違う視点から見つめ直してみると、また新たな魅力を発見できるかもしれません。また、院生の中には「もし、田沢湖に玉川の水が引き込まれなかったら、今頃、田沢湖周辺の生活やクニマスはどんな様子だったんだろう。」などという疑問をもつ人もいたようです。このようなことを考えてみるのも面白いなあ…と思った次第です。いずれにせよ、地域資源を活用した教材をつくっていく際の参考にしたいものです。

2日間の仙北市の研修により、我々院生同士や先生方との親睦もグッと深まりました。泊まりがけの研修でさらに強まった絆を今後の秋田大学での学びや研究へとつなげていきたいと思います。

2日間、大変お疲れ様でした。



【雄大な田沢湖を背にして…】

## 課題実地研究 in 田沢

発達教育・特別支援教育コース  
学部卒院生1年次 佐藤 茅奈美

10月14日から15日の1泊2日の日程で実地研究 in 田沢に参加しました。この研修は、1日目は、西明寺小学校へ訪問、2日目は田沢にあるアルパこまくさ、田沢湖発電路、御座石、クニマス未来館、たつこ像・十和田湖噴火の視察 with 林先生という日程で行われました。

今回の実地研究で訪問した西明寺小学校では、授業参観をしてきました。非常に学校の雰囲気が高く、児童は、楽しそうに授業に参加していました。そのため、TTの連携がきちんとなさっていたところから児童の様子がそのようになっていたのではないかと考えているところです。今回は、新型コロナの影響でICTを用いた授業参加の児童もいました。そのため、教頭先生が児童の家にプリントやノートなどを届けたりすることもあるようです。加えて、仙北市教育委員会の皆様方から仙北市の教育などについて熱く語っていただき

ました。仙北市の教育委員会教育長の方は非常に熱い方で「子どもの心に火を灯す教師」という言葉の通り西明寺小学校の先生方そのようでした。私も、西明寺小学校の先生や仙北市教育委員会の皆様方のように熱く児童に良い影響を与えることができる教師を目指していきたいと思いました。

また、アルパこまくさ、田沢湖発電路など、自分自身がなかなか見学することがないところを見ることが出来ました。林先生から、火山などの貴重なお話を聞くことが出来ました。自然は素敵だなと感じたと共に長い歴史があるお陰で私達がこの地で生活をする事が出来ていることに改めて感謝したいと思いました。日頃から感謝の気持ちを忘れず、日々精進していきたいです。2日間貴重な体験をする事が出来ました。

来年はどこに行くのか、今から楽しみです。

## 今後の行事予定

2023年

1月 24日(火) 研究成果事前発表会

2月 6日(月) 実践研究報告書 提出日

17日(金)

18日(土) 教師力高度化フォーラム